

都市化と宗教——世俗化論再考

石井 研 士

はじめに

本紙のテーマは、「世俗化論再考」であるが、私はいささかとまどいを感じざるを得なかった。「世俗化」は、確かに西洋社会において極めて重大な社会的宗教的現象として、宗教者のみならず宗教を研究する者の関心を惹起した。しかしながら、日本において「世俗化」が、宗教者には迫り来る危機感を、そして宗教学者あるいは宗教社会学者の旺盛な研究意欲を呼び起こしたとは言いがたい。西洋の理論に敏感に反応する学問の体質にもかかわらず、一部の優れた業績を除いては、⁽¹⁾「世俗化」がは

なばなく論議されたことはなかったように思われる。

「世俗化論」は宗教社会学の領域において、ブームといつていいほど頻繁に取り上げられ論じられた。しかしながら、「世俗化」という言葉の中には、ドベラー教授が「世俗化理論と社会的パラダイム」の中で、バーガーやルックマンの「世俗化論」を比較考察しているように、⁽²⁾きわめて多種多様な意味が込められている。なぜ、「世俗化論」はブームとなり、多岐にわたる意味を包摂しながらも学術用語となりえたのか。今、「世俗化論」の再考と言われて、どの「世俗化論」を再考すべきなのか、あるいは「世俗化」が多義的意味を持ちえたことの

再考であるのか、それとも具体的な宗教現象による再考であるのか、私はとまどうのである。しかしながら、少なくとも「世俗化」がどのようなものであるかが十分に論議されることなく、これまた西洋において「世俗化論」の再考が説かれたがゆえに、世俗化の再考に走ることだけは謹まねばならない。⁽³⁾

一、「世俗化論」再考

西洋社会において、「世俗化論」の再考を促す直接の要因となったのは、「世俗化」が論じられるようになったときと同様に、具体的な宗教現象であった。通常、再考を促す宗教現象として指摘されるものには、アメリカやイギリスをはじめとする先進産業社会におけるニュー・レリジョンの勃興、アメリカにおいて顕著に見られるコンサーヴァティブ・プロテスタンティズムの台頭と積極的な政治への関与、北アイルランドやポーランド、あるいはフィリピンやラテン・アメリカにおけるカトリックの政治的状況への積極的関わり、北アフリカにおけるイスラム教の急浸透などがある。

しかしながら、こうした指摘は必ずしも「世俗化論」の再考を余儀無くさせるものではないように思われる。つまり、宗教の復興とみられる事実も、高度に産業化を遂げた社会が再び宗教化したことを裏付けるには、あまりに不十分である。ニュー・レリジョンの出現は、その数とマスコミによるセンセーショナルな取り上げられ方にもかかわらず、「世俗化」を確証させるものであるというウィルソンの説明は、依然として妥当性を有しているように思われる。

コンサーヴァティブ・プロテスタンティズムの台頭は、宗教の国アメリカの行方を見定める上で重要な現象であるが、その社会に対する影響力に関しては、まだ判断を下す時期には到っていない。また、解放の神学など政治に積極的にかかわろうとする宗教の存在は、高度に分化・専門家の進んだ社会における宗教状況を前提に打ち立てられた「世俗化論」を覆すものではないだろう。⁽⁴⁾ 合理化と効率を極度に推し進め、高度な分化と専門化の状態にある社会においては、宗教は依然として社会の周辺に位置している。

ハモンドは、西洋社会における昨今の宗教現象を取り上げて、宗教社会学の創設者が述べた聖から俗へという単一直線的な「世俗化論」の修正を考察している。⁽⁵⁾ しかしながら、もし、ハモンドが指摘する宗教現象が、必ずしも「世俗化論」の「再考」を迫るものではなく、西洋世界を理解する上では依然として「世俗化論」が有効であるとしても、「世俗化論」が普遍的にどの産業社会にも適応しうるということにはならない。

二、日本における「世俗化論」

こうした、西洋社会において、宗教者ばかりでなく、研究者をも渦中に巻き込んだ「世俗化」の論議は、日本においては、むしろさんくさいもののように思われてきたのではないか。

「世俗化」が真剣に取り上げられなかった状況の背後には、西洋の理論が容易に適用できない、宗教現象に現われた日本文化の特殊性が意識されている。柳川啓一氏と阿部美哉氏は、日本においては西洋でいう「チャーチ」「セクト」の識別が困難であることを指摘し、「制度宗教

の世俗化」は日本においてさほど重要な問題ではないと述べている。⁽⁶⁾ また、「世俗化」の概念が、「とりわけキリスト教の自己理解において中心的位置を占める」言葉であり、日本社会における「世俗化」に関するすぐれた研究がもつぱらキリスト教に集中してきたことを考慮すると、文化の異なる日本社会における宗教に対して「世俗化」の概念を適応することは困難なのであるうか。

先に引用した柳川啓一氏と阿部美哉氏は、「西洋と比較しうるような宗教制度のない社会の社会学的研究においては、まず、ターゲットとなる宗教現象を見出し、次に、その研究にふさわしい理論的枠組の構築の作業を行わねばならない」とし、もし、西洋の世俗化と比較しうるような何らかの社会的宗教的現象が日本にあるとすれば、それは「祖先崇拜に関する現今の問題である」と指摘している。⁽⁸⁾

三、都市の宗教

私が本論文で扱う対象は、祖先崇拜でなく都市の宗教である。それゆえに、この場合の「都市」は、合理化と

効率に貫かれた、高度に産業化の進んだ現代社会の縮図としての都市である。ブライアン・ウィルソンによれば、宗教は最も合理化しにくい領域であるという。宗教制度は共同体的制度であって、合理化を受け入れにくく、専門化が遅れている領域である。⁽¹⁰⁾ 社会は道徳的体系から技術の体系へと変化したのであり、社会の統制は技術的問題である。⁽¹¹⁾ 超越的秩序としての宗教が、社会体系の構造的分化にともなう、次第にその領域を縮小していく過程を「世俗化」と呼べば、もはや宗教は、高度に産業化を遂げた社会においては、社会の中心から追われ、個人の要求に応えようとする「私事」となる。また、ドベラー教授は、「現代社会における宗教の役割」の中で、産業化した社会はその結果として巨大な都市の発展をもたらし、そうした都市での「生活は、あらゆる部分にわたって、合理的技術的となり、生活の聖なるオーラは大失われてしまった」と述べている。⁽¹²⁾

しかしながら、産業化による共同体の崩壊によって宗教は公的領域から私的領域へと撤退していくという仮説は、はたしてどの程度まで普遍性を有しているのだろうか

四、銀座の宗教⁽¹⁵⁾

銀座は、一丁目から八丁目までを合わせても、一平方キロメートルに満たない地域である。かつては四方を川で囲まれていた。現在、川は埋立てられ、川に代わって、高速道路が他の地域と銀座とを分離している。区画は、中央を走る銀座通りによって、銀座東と銀座西のそれぞれ八ブロックに整然と分けられている。銀座通りの西端は、京橋から八重洲、日本橋へと続き、東端は新橋に繋がっている。銀座の中央で銀座通りと交差して晴海通りが走り、北端は有楽町に、南端は築地に接している。

銀座は、日本を代表する高級商店街であるとともに、歓楽街としても著名である。また、国会議事堂を初めとする中央官庁に近接しているために、情報の収集、流通の場でもあり、多くの新聞社、通信社が共在している。銀座はこれまで、明治時代の文明開花の象徴として、大正ロマンそのものとして、あるいは高度経済成長がもたらした都心への機能集中化の中核として、存在してきた。絶えず何らかの意味において、日本社会の中心にしてか

か。日本社会においても宗教の個人化現象を見ることは可能であるが、こうした現象が、西洋と同じプロセスによって生じたものであると言えるのであろうか。私は、「世俗化」が本当に普遍的な現象であり「世俗化論」が同じ社会構造・産業構造にある社会であれば、成立する仮説であるのかどうかを、都市における宗教の在り方から考察する。合理化により非人格的で匿名の役割遂行者の相互行為として成り立つ現代社会においても、宗教には積極的に社会と関わりを持つ可能性は残されていないのだろうか。トーマス・ルックマンのいうように、世俗化が、「文化的・宗教的・社会構造の状況が歴史の上でユニークな結び付きをした結果」であるとすれば、西洋社会とは異なった結び付きのパターンが存在する可能性は考えられる。

具体的調査地としては、現代社会の代表的都市と考えられる東京、とくに銀座地区を選んだ。また本論文では、個々の宗教施設に関する調査データを綿密に述べることも、銀座の宗教の全体を把握することに重点を置いている。

つ尖端的位置を占めてきたといえる。しかしながら、銀座は必ずしも長い伝統を背負った地ではない。生成してからおよそ三八〇年、その間に、少なくとも四度にわたる潰滅的打撃を受け、そのたびに町の様相は一変し、それまでの歴史的背景は断ち切られている。

銀座には、これまでの調査から明らかになった限りにおいて、三十六の宗教施設が存在する。一丁目から順に列挙してみよう。

一丁目

白菊大神（伏見稲荷）

銀座西ビル屋上、商売繁盛・家内安全

幸福荷（伏見稲荷）

並木通り、商売繁盛・家内安全

法力稲荷（日蓮宗）

銀座Aビル屋上、家の守護

ポーラ稲荷

ポーラ化粧品東京営業所屋上、商売繁盛

末広稲荷（伏見稲荷）

灌漑ビル隣り、火防

日枝神社（日枝神社） 大和交通ビル屋上
山栄神社 山本駐車場ビル屋上
安平稲荷 万安楼（料亭）邸内

子育 一平稲荷（豊川稲荷）
一平ビル屋上
出世地藏尊・三囲稲荷 三越デパート屋上
歌舞伎稲荷 歌舞伎座邸内

二丁目 天玉稲荷（伏見稲荷） 大阪電機暖房株式会社屋上
銀座稲荷（豊川稲荷） 越後屋ビル七階廊下、火防
栄久稲荷（伏見稲荷） 吉田ビル屋上
銀座稲荷（伏見稲荷） オリンピックビル四階
金光教銀座教会

五丁目 白笹稲荷（伏見稲荷） 鹿島ビル屋上
熊谷稲荷（日枝神社） 日本堂時計店二階、火防
伏見稲荷（伏見稲荷） 与板屋屋上、火防
豊川稲荷（豊川稲荷） 安藤七宝店屋上
あづま稲荷（伏見稲荷） あづま通り三原小路、火防

三丁目 龍光不動尊（真言宗・高 仰 ファッション関係者の厚い信
野山）
朝日稲荷（伏見稲荷） ビル屋上、日枝神社の末社
宝珠稲荷 歌舞伎座横の通り、町内守
護神

六丁目 清澄・玉樹・伏見稲荷 ビル建設により移転中、火
防
鶴護稲荷（伏見稲荷） 松坂屋屋上、火防
七丁目

四丁目 銀座教会 メソヂスト、明治二三年に
築地から移転
宝童稲荷 服部別館横の小路、火防、

成功稲荷（豊川稲荷） 資生堂本社ビル屋上
・満金龍神 商売繁盛・事業成功
三剣稲荷（伏見稲荷） セブンスタービル屋上
宝珠稲荷 石井ビル屋上

豊岩稲荷 TOTTO裏の小路、縁結
熊谷稲荷 小路

八丁目 金春稲荷 京橋会館屋上、芸能上達
八官神社 外掘通りに面した八官ビル
光高稲荷（伏見稲荷） 吉野屋店内、火防

銀座の宗教の変容

銀座は、為政者の意図に沿って人工的に造営された町である。銀座の含まれる中央区の大半は、徳川家康が江戸幕府を開き、城下町建設の一環として、形造ったものである。「銀座」の地名からもわかるように、銀座は、この地に幕府の銀貨鑄造所があったことに由来する。この幕府御用達の工業地は、江戸最大の大火といわれる明暦の大火（一六五七）によって灰燼に帰し、以後町は職人の町へと変わっていく。

銀座が明治政府の近代化政策のモデル地域として大きく変貌するきっかけとなったのも、同じく大火によるものであった。明治二年に初めて「銀座」の町名が正式に

承認されたが、同年および三年後の明治五年に大火にみまわれ、銀座の大半は延焼してしまふ。当時の東京府知事由利公正は、明治五年の大火の翌日、内閣に不燃都市の建設を提案している。西洋を模範とする近代社会の建設を急いでいた政府は、銀座の再編成を決定する。同じ年に横浜・新橋間を日本初の鉄道が通る予定であり、首都の表玄関として銀座の煉瓦街建設が決定された。道幅は拡張され、二度の大火に残った家も取り壊され、銀座はまったく新たに建築されることになった。⁽¹⁶⁾

こうして銀座は、政府の方針により、強制的に変貌を迫られ、近代都市として生まれ変わる。しかしながら、西洋風に建設された煉瓦街に、人々は以前と同様に宗教を祀り始める。四丁目の銀座出世地藏尊は明治の初期、掘の埋立て中に発見されて信仰を集めた。明治の終りから大正の初めにかけては、盛大に縁日が開かれ、銀座稲荷の風物詩として多くの人を集めた。現在、四丁目の三越デパートの屋上に、三越の守護神である三囲稲荷とともに祀られている。また、二丁目の銀座稲荷は、明治四三年の土蔵の崩壊により死者のでた春木屋の惨事の際

に祀られ、現在は大銀座祭に併設される銀座八丁神社めぐりの第二番札所となっている。銀座は、関東大震災、東京大空襲によりその大半を焼失するが、そのたびに急速な復興を遂げている。そして、銀座の復興とともに、銀座の宗教もいち早い立ち直りを見せている。

現在の銀座は、都心部 (Central Business District) の一区域を占める。とくに都心部の中でも、丸の内や霞が関のような業務街・官庁街と異なっており、「高級シンボル商店街」、「宣伝広告塔」、「情報センター」、「高級歓楽街」の機能を荷なった空間としてあるという。銀座がこうした機能を果たすようになったのは、高度経済成長以降のことであるが、この時期にも宗教は銀座から追放され消滅してしまふどころか、その数を増やしている⁽¹⁸⁾。日本を代表する企業であれば、必ずといっていいほどなんらかの宗教を祀っている。そうした企業は、支店、営業所、工場、あるいは社員のための寮を建設するときには、企業で祀る神を分霊し、祀らせるのである。それゆえに、企業が発展し、経営が拡大されればされるほど、宗教は

増えていくことになる。銀座においても、この地に進出してきた会社で、新たに祀りはじめたものも少なくない。企業と宗教は、ある点においては対立的であるよりは、むしろ親和的、相補的である。単にこれまで祀られていたがゆえに祀られ続けているというのではなく、より積極的に祀ろうとする姿勢を見ることができると。

空間的に見ると、ビルの屋上に位置するものが圧倒的に多い。昭和六〇年度の全国地価公示価格によれば、銀座五丁目鳩居堂前が最も高く、実際の売買価格はその数倍に昇るといふ。きわめて高い地価のために、稲荷を初めとする宗教施設は、いやおうなくビルの屋上に移らざるをえなくなる。宗教施設の屋上化現象の背後にあるのは、高価な土地を最も効率よく、有効に利用しようとする合理的な姿勢である。こうした姿勢は、町会が祀る稲荷などには大きな負担となる。神社本来の在り方がどういふものであるかを特定するのは困難であるが、一般的な認識としては、地面に接し、屋根の上は空であることが最低の要件であろう。ビルの屋上の稲荷は、すでにこの要件のひとつを欠いている。

宗教を支える人々

こうしたさまざまな宗教施設は、どのような人々あるいは集団によつて維持され、祀られているのだろうか。銀座の夜間常住人口は極めて少ない。これに対して昼間人口は膨大な数に昇る。銀座の一日に従って人口の動態を見ていくと、深夜から早朝にかけては、およそ三〇〇〇人の夜間常住者と、一〇〇〇人程度のガードマンが、銀座の住人となる。朝、銀座へ業務のために通勤する人口はおよそ三〇万人。その後、ショッピングや情報の収集などに銀座に集まる人々がおおよそ二〇〇万人。夕刻になり、昼間業務人口とショッピングを楽しむ人々が帰途に向かう頃、一〇万から二〇万人の夜の社交人口が銀座の住人となる。そして再び深夜、過疎化した銀座へと戻るのである。さらに、銀座は日本で初めて歩行者天国を実施した場所であるが、土曜日の午後や日曜日には、平日に増す人々が銀座に集まる⁽¹⁹⁾。

こうした人々を、宗教との関係から、便宜的に「家」、「町会・商店街」、「企業・会社」、「デパート」、「教会」

の五つのグループに分類して考察を進める。★印は、「銀座八丁神社めぐり」の札所である。

家	町会・商店街	企業	デパート	教会
白菊大神	★幸福稲荷	ボアラ稲荷	★鶴岡稲荷	★金光教銀座教会
法力稲荷	★朝日稲荷	日枝神社	★龍光不動尊	銀座教会
末広稲荷	宝珠稲荷	天玉稲荷	★銀座出世地蔵尊	★八官神社
山栄神社	★宝童稲荷	銀座稲荷		
安平稲荷	★あづま稲荷	歌舞伎稲荷		
★銀座稲荷	★清澄・玉樹・伏見稲荷	熊谷稲荷		
一平稲荷	★豊島稲荷	豊川稲荷		
白笹稲荷	熊谷稲荷	★成功稲荷		
伏見稲荷	★金春稲荷			
三剣稲荷				
光高稲荷				

「家」グループ

第一のグループは、代々銀座で家業を営み、銀座に住する人々であるが、夜間常住人口が急速に減少してきたことから分かるように、こうした人々の多くは、店は銀座の老舗として営業を続けてはいても、銀座に住むことは少なくなった。より住みやすい居住空間を求めて、

職場と住居の分離が進んでいる。

第一のグループの場合、かつては邸内に祀られていたものが、建物の高層化にともない、祀る場所がビルの屋上に移され、祀り続けられている事例が圧倒的に多い。こうした「銀座旦那」と呼ばれる人々は、銀座に店を構えていることに強いプライドを持っており、代々続いた「家」とその「家」を守る「神」とは不可分の関係にある。祀られる神は、その地から離れることができず、祀る者が夜間店を離れても、祀られた神はその場にとどまり、「家」を守り続ける。都市化による職住の分離は、神と「家」との分離を意味しない。

「町会・商店街」グループ

第二のグループは、第一のグループが「家」を基盤として成立しているのに対して、町会あるいは商店街といった地域を同じくする者によって維持され守られているものである。しかしながら、地を同じくする者として、その町会なり商店街の商売繁盛を願い、火災のないことを祈るわけであるが、その結合力はあまり強くないよう

に思える。老舗のプライドをもつ「銀座っ子」は、「銀座っ子」だけで固まり、町会の運営に積極的にかかわっていく。他方企業の町会担当者や新興商店の店主は、人手と金は提供するが、町会運営には消極的である。十月に開催される「大銀座祭」では八日間にわたって「銀座八丁神社めぐり」が併設される。この期間中、町内で当番を決め、参拝者の集印帳に判を押す。八丁目の豊岩稲荷の場合、祭の期間中の当番には会社の社員もあたるが、平常の管理はもちろんのこと、準備から片付けまではすべて銀座に昔から住む人々が行う。銀座において、その存続が一番あやぶまれるのが、このグループを母体とする宗教である。

「企業・会社」グループ

第三のグループは、企業あるいは会社によって祀られている事例である。宇野正人のレポートによれば、ほとんどすべてといっていいほど大企業は何かを祀っている。国内に活動が限定される会社だけではなく、海外にも名の知られた大企業が、本社や支社、あるいは工場などに

必ずといっていいほど神社や不動尊などを祀っているのである。⁽²¹⁾一丁目のボーラ化粧品株式会社のボーラ稲荷、

二丁目の大阪電機暖房株式会社の天玉稲荷、七丁目の資生堂化粧品成功稲荷など数多く見つけることができる。

二丁目の天玉稲荷は、大阪電機暖房株式会社の屋上に安置されている。毎年初午には、会社をあげて祝う。この時には、会社の人間だけではなく、大阪電機暖房株式会社と関係のある会社、小会社、下請の会社はすべておまいりにやってくる。私が調査した昭和五九年には、およそ三〇〇人ほどが列席していた。この会社は初午だけでなく、成田山新勝寺へも、課長以上の社員と、下請の会社とで総勢三〇名ほどのツアーを作り、おまいりに行く。会社が予め切符を手配し、関連会社に送るのである。

親会社の祀る神仏は、親会社はもちろん、下請あるいは取引のある会社によって祀られ、神仏は親会社を頂点とする関連会社すべての繁栄を保証する。大企業の多くが特定の神を祀り、全国に支店を広げ関連会社を増やしてゆくとともに、神の一大ネットワークが築き上げられていく。

「デパート」タイプ

第四のタイプは、企業の形態ではあるが、第三のタイプがもつばらその企業内や、擬似的な「家」あるいは「一族」としての企業中でのみ祀られているのに対して、より広く一般の人々に開放されている点を特徴としている。第四のタイプに分類されるのはデパートであるが、デパートの屋上には、往々にしてなんらかの信仰の対象物が祀られている。⁽²²⁾

すでに銀座三越については述べたが、銀座にはこのほかにも松屋と松坂屋がある。松屋の屋上に祀られているのは龍光不動尊である。昭和五年、現在の建物に改築されるたびに勧請された。正月、五月、九月二八日に盛大な例祭を行なっている。龍光は流行に通じるといって、ファッション関係者の信仰が厚いという。⁽²³⁾

六丁目松坂屋屋上に祀られているのは鶴護稲荷神社である。火除の神であり、大正一二年九月の関東大震災、また、大正一三年三月日暮里の大火のときにも神域社殿、松坂屋社宅は焼失を免れた。昭和四年二月に日枝神社が

ら神璽を分霊し銀座本館屋上に奉安したという。⁽²⁴⁾

企業の祀る神が、どちらかといえば会社や会社関係に限られ、閉鎖的であるのに対して、同じ企業ではあっても、デパートのそれは開放的である。誰でも開店中であれば、お参りすることができる。デパートという消費者に物を売る、あるいはサービス業としてのデパートは、物だけではなく、宗教にかんしても消費者にサービスを提供することになる。

銀座に点在する宗教を、銀座に集まる二〇〇万人といわれる人々に開放する機会がある。銀座では、明治百年を記念して、昭和四三年から大銀座祭が行なわれている。この催物の一環として、昭和四八年より「銀座八丁神社めぐり」が行なわれている。昭和五五年からは「七福神巡り」が加わった。神社といっても、神職のいるものは、わずかに八官神社だけであるが、十三社を選んで札所とした。大銀座祭は八日間に渡って行なわれるが、銀座通連合会は期間中の巡拝者のために数千枚の集印帳を用意する。巡拝者が札所をまわることに判子を押してくれる

ようになっている。十三社を回って約一時間半、期間中に数万人が巡拝するという。

表からも明らかのように、大銀座祭に一般に開放される十三社の札所の大部分は、「町会・商店街」と「デパート」である。町会や商店街の祀る神が、特定の地域を守護する神であるとなれば、そうした地域の統合としての銀座の祭は、まさにそうした神の一年に一度の晴れ姿である。また、デパートも、商品の売却のために進んで人を集めようとするために、銀座八丁神社めぐりの札所となる。

これに対して、「家」タイプと「企業・神社」グループは、札所となることが、ごく一部を除いてはないようである。「企業・会社」を「家」の拡大、延長と考えれば、原則的にいって、「家」を守る神を他の人々にも開放する必然性はない。

おわりに

銀座を例にとつて考えた場合、都市化あるいは都市が宗教を排除した事実が存在しない。都市機能が集中化し、

建物が高層化したことによって、やむなくビルの屋上に移された事例は数多い。しかしながら、建物がビル化することを理由に撤去された事例を見出すことはできなかつた。いったん祀られた神は、その地を離れることなく、祀り続けられている。一丁目の末広稲荷のように、持ち主が転居したために祠だけが残された例もあるが、新たな土地の所有者が、再び伏見稲荷から勧請し、祀り直している。

むしろ、全体として見た場合には、銀座の都市化にもなつて宗教施設は増えていると考えられる。大企業が銀座に進出し、事務所を構えれば、たとえ祠ではないとしても、事務所の一角に神棚を設け祀る事例は多い。

日本において、都市化と宗教は、相反するものではなく、むしろ親和的、相補的でさえある。利潤の追及や効率の上昇の背後にある原理が合理化であり、宗教はそうした合理化とは相入れない領域ではあるとしても、両者は決して相互に矛盾・排除する関係にはない。日本人は、一方では経営の合理的運営を貫徹させながら、今一方では「家」や「企業・会社」の繁栄を願い、「町会・商店

街」の商売繁盛、火事等の禍の起こらないことを願って、神を祀る。

近代化にともなう制度的宗教の衰退と宗教の個人的領域への移行は、そのプロセスが西洋社会と同じプロセスであるかどうかの判断は慎重を要するとしても、日本においても見ることができ。しかしながら、宗教の個人的領域への撤退、宗教の内心倫理化が、西洋社会において見られた近代化、合理化の結果として、日本においても解釈できるのだろうか。民間信仰という言葉で片付けてしまうにはあまりに積極的に、宗教は、高度な産業化を遂げ、分化・専門化が進んだ現代日本の社会と関係している。ルックマンが言うように、西洋社会に見られた世俗化は、文化的・宗教的・社会構造的要因が歴史の上でユニークな結び付きをただけであつて、西洋社会とは異なつた社会構造と宗教との結び付きを日本にみることはできないだろうか。

ドベラーレ教授のいうピラリゼーションもまた、きわめて特定の地域と特定の研究者に限定されて用いられている概念である。⁽²⁵⁾こうした特定の社会と宗教との関係を

表すのに適切であると思われる概念が成立するとすれば、「世俗化」は、むしろ一般的普遍的であるよりは、きわめて特殊であると考えることはできないだろうか。ダニエル・ベルは、社会の世俗化を「Secularization」文化の世俗化を「Profanization」と区別している⁽²⁶⁾。宗教的感受性と信仰における変化が、第一に文化において生じるものであるとすれば、社会構造の変化と文化の変化の關係にはさまざまなパターンの可能性を考えることができるだろう。「世俗化論」を安易に一般化することなく、個々の文化と社会との關係、変化を考慮した上で、「世俗化」は一般論化されなくてはならない。

註

- (1) 「世俗化」を直接扱った論文としては、井門富二夫『世俗社会の宗教』(一九七二年 日本基督教団出版局)、『神殺しの時代』(一九七四年 日本経済新聞社)、『宗教と社会変動—世俗化の意味を求めて』(『思想』六〇三号 一九七四年 岩波書店)等の一連の業績、ヤン・スインゲドー「現代の世俗化論争—ルックマンを中心として」、『宗教研究』二〇八号 一九七一年 日本宗教学会)、『日本の宗教社会学における世俗化説に関する若干の考

- 察」(『CISRR東京会議紀要』一九七八年 CISRR東京会議組織委員会)等の業績、田丸徳善「世俗化の問題—その予備的分析」(『CISRR東京会議紀要』一九七八年 CISRR東京会議組織委員会)、『デヴィッド・リード「世俗化理論と日本のキリスト教—日本基督教団の場合」(『CISRR東京会議紀要』一九七八年 CISRR東京会議組織委員会)などがある。
- (2) ドン・ハラー教授は、その著書『Secularization: A Multidimensional Concept』(Current Sociology, Vol.14, No.2, 1-216, 1981)において「世俗化」を「教会への関与」「非聖化」「宗教変動」の三つの次元に区別することによって、概念の明晰化を図っている。
- (3) 最近では中野毅氏が「世俗化論再考序説」(『理想』No.629 1985年)と題して、「世俗化論」の理論的検討を行っている。
- (4) 拙稿「世俗社会における仏教の可能性」『理想』No.633 168—176 1986年
- (5) Philip E. Hammond(ed.), *The Sacred in a Secular Age: Toward Revision in the Scientific Study of Religion*, University of California Press, 1985.
- (6) 柳川啓一・阿部美哉「日本における宗教社会学の課題」『東洋学術研究』Vol.17, No.3, 14頁。
- (7) ヤン・スインゲドー「世俗化」小口偉一・堀一郎監修『宗教学辞典』1973年。

- (8) 柳川啓一・阿部美哉「日本における宗教社会学の課題」『東洋学術研究』Vol.17, No.3, 14頁。
- (9) Bryan Wilson, *Contemporary Transformation of Religion*, Univ. of Newcastle upon Tyne, 1976 (井門富二夫・中野毅訳『現代宗教の変容』ヨルダン社 1979年、36頁)
- (10) 同上、20頁
- (11) 同上、18頁
- (12) Karel Dobelaere, *The Role of Religion in Modern Society*, 栗原淑江訳「現代社会における宗教の役割」『東洋学術研究』Vol.25, No.1, 34頁
- (13) 拙稿「世俗社会における仏教の可能性」『理想』No.633 168—176 1986年
- (14) Thomas Luckmann, *The Invisible Religion, The Macmillan Company*, New York, 1967 (赤池憲昭・ヤン・スインゲドー訳『見えない宗教』日本版(の序))
- (15) 詳しうは、拙稿『Japanese Journal of Religions Studies, 1986 近刊を参照されたい。
- (16) 日枝神社は、銀座の氏神である。また、一部は鉄砲洲稲荷神社の氏子区域である。
- (17) 明治の大火と銀座の再建によって、当時祀られていたはずの稲荷や地藏、あるいは神社がどうなったかは、記録に残されておらず、明らかではない。上記した宗教施設の中には、江戸時代からの由緒を持つものも少なくな

- い。宝珠稲荷は宝永三年(一七八六)から、法力稲荷と栄久稲荷は天保(一八三〇—一八四三)からと、祀られた時代が明確なものもあれば、宝童稲荷や白笹稲荷、安平稲荷や豊岩稲荷、あるいは末広稲荷や金春稲荷のように、いつとは特定できないが、徳川時代に信仰を集めたという言伝えが残されているものもある。
- (18) 服部銑二郎「都心盛り場『銀座』の機能と象徴性」磯村英一・吉宮重夫・米谷栄二編『人間と環境都市—大都市中心部』鹿島出版、昭和五〇年
- (19) 知りうる限りの文献から明らかになった宗教施設は、移転二件、不明三件である。
- (20) 服部銑二郎「都心盛り場『銀座』の機能と象徴性」磯村英一・吉宮重夫・米谷栄二編『人間と環境都市—大都市中心部』鹿島出版、昭和五〇年
- (21) 宇野正人「企業における神社祭祀」第四三回日本宗教学会(一九八四年)発表資料。この資料には、三菱、出光、東芝、日立を初めてとして三十八の企業の神社祭祀が記載されている。
- (22) 高野山奥院へ到る参道の両側に、企業の墓地といつてよい一群の墓地がある。この墓地には、キリンビール、ニッサン、新明和工業など、多くの企業が自社の物故者のために墓を用意している。また、京都の伏見稲荷の鳥井にも、電通といった企業の寄進が見られるなど、企業と宗教との結び付きを示す例は他にも数多く見ることが

できる。

(23) デパートは、商品・サービス・情報などを提供しているが、宗教的な場ともなりうる。日本橋三越では、正月店内に隅田七福神を設け、集印帳を押し回している。これは三越の守護神である三冊神社が隅田七福神の札所となっており、三越の屋上に三冊神社が祀られているためである。七福神めぐりは、近年のブームのためもあつてか、なまざまなデパートで行なわれている。

(24) 松屋銀座「龍光不動尊縁起」(日付なし)。

(25) 銀座松阪屋「竊護稻荷大明神由来き」昭和四年。

(26) ビラリゼーションに関する文献は、圧倒的にオランダ・ヘルギーの両国に集中している。最近では *Acta Politica* が *Consociationalism, pillarization and conflict-management* と題して特集を組んでいる。

(27) Daniel Bell, "The return of the sacred? The argument on the future of religion," *British Journal of Sociology*, Vol.28, No.4, 1977, p. 419—449.

(ふしけんじ・東京大学宗教学研究室助手)